

変形性足関節症

症状

変形性足関節症とは

骨と骨が連結する「関節」は、表面が軟骨でおおわれています。軟骨がすり減っている状態を変形性関節症といい、足関節に発症した場合は変形性足関節症となります。外傷や関節炎によって発症することもあります。明らかな原因がなく発症することもあります。

症状

変形性足関節症では足関節に痛みが生じます。とくに軟骨のすり減っている部分に疼痛があり、歩行時に強くなります。変形が進行すると、外観上も足関節が内反（内側に傾くこと）や外反（外側に傾くこと）することがあります。

原因・病態

原因

足関節周辺の骨折により生じることや、感染性足関節炎に伴って生じることがあります。また明らかな原因のない場合もありますが、この場合には足関節が不安定なゆるい人に生じることが多く見られます。

病態

変形性足関節症では関節の軟骨がすり減っている上に荷重がかかることにより、激しい疼痛が出現します。女性に多く、わが国では内果（うちくるぶし）側の関節面から変形することが多く見られます。一度すり減ってしまった軟骨は元には戻らないため、それ以上変性が進まないように心掛ける必要があります。また変形が高度に進行した場合には手術を行うことがあります。



足関節の内反(矢印)や、関節の腫脹(楕円)が認められます

診断

●以下の症状が認められた場合、変形性足関節症と診断されます。

- 足関節に痛みを感じ、歩行時に増強する。
- 足関節が腫れ、外観上、内反や外反の変形を認める。
- 足関節不安定性を認める。
- 足関節のレントゲン撮影にて、関節のすき間が狭くなっている。



単純X線やCTにて関節裂隙（関節のすきま）の消失を認める（矢印）

治療

●治療方法

保存的治療法

- 変形の程度が軽い場合には、保存的治療法（手術をしない治療法）を行います。
- 足底挿板（靴の中敷き）を用いて足部の外側を持ち上げることにより、内側に集中している荷重を外側に移動させます。
- 足関節に痛み止めや炎症止めの注射を打つことがあります。



足底挿板：踵の外側を持ち上げる構造になっている

手術療法

比較的進んだ変形の場合、その程度や年齢、活動性などにより種々の手術療法が用いられます。ただし、術式によっては専門の医療機関の受診が必要です。

- 下位脛骨骨切り術 - 脛骨（すねの骨）を切り、関節の傾きを矯正して固定する手術法です。それほど変形が進んでいない場合に行います。
- 足関節固定術 - 変形が進行した症例に用いられます。足関節を固定する手術ですが、固定した場合でも周辺の関節が動くようになり、日常生活で困ることはほとんどありません。安定性が得られるため、運動や農作業に従事する方に用いられます。
- 人工足関節全置換術 - 変形が進行した症例に用いられる術式で、関節面を人工関節に置換します。可動域が温存されるため、術後のリハビリがスムーズに行えます。



下位脛骨骨切り術



足関節固定術



人工足関節全置換術